

# 哲學研究

第七十七號

第七卷  
第八冊

## 喜劇と妄想 (承前)

今村 新吉

### 五

已記條下で妄想の起る時其或者では暫に妄想自身に就ての弗訂正性がある計りでなく尙弗透徹性を併有してゐるものがあることを述べまして、此弗透徹性の起りますのは生物學の見地よりしまして社會的本能の或缺損に基くものであるとの推論を試み、且喜劇に在ては可笑しい中に人に感興を起さすものは此社會的本能に基く感情移入に依ることを述べ之を對峙せしめました、本章に於きましては尙臨床的に之を證明し且此社會的本能の缺損有無が妄想懷抱患者の識別上重要なものであることを立論しやうと思ひます。

扱本文に立入る前の緒言として先づ妄想狂に就ての歴史を叙説し殊に最近の所を稍詳しく述べて見やうと思ひますが、之等疾患の研究に對する出發點は佛獨兩國相異つて居りますから各別に之を擧げませう。

獨國に於て現今では *Verrücktheit* (*Paranoia*) 及 *Wahnsinn* なる名稱間には一般に劃然たる區別を附せられて居りますが昔即ち千八百五十年頃には尙學者の好々により之等の語を混同して居りまして妄想狂は其時代では躁狂又は鬱狂に續發する轉歸状態だとの學者の見解でありました、(1)フリードリヒ、ホフマン氏は本症は原發的に起り得るものだと唱へて居ながらも尙其當時の見解から全然脱却することが出来なかつたと見えるのは同氏の精神病分類表中に *Verrücktheit* なる項目を鬱憂性、興奮性、幻覺性及本能性などに分ちまして、幻覺性のものを感情移動の隨伴する妄想性精神病より全然分離することが出来なかつたのであります、併し(2)老スネル氏に至つて初めて其命名は違て居りますが、今日 *Verrücktheit* 又は *Paranoia* なる語の許に獨立的疾患を認めさせるに至つた基礎を與へました、同氏は幻覺を隨伴する妄想の發生を見る精神病がありました、追跡妄想がある時には自家感情の増進のあるに由て憂鬱狂と、驕慢妄想の際には觀念奔逸及一般感情興奮が缺けてるから躁狂と區別し得

べきもので且他の精神病型式よりは精神的生活を侵すことの尠い疾患であつて、之を單一狂 *Mono manic* 又は *Valusim* と名け鬱憂狂及躁狂と共に精神病の根本的形態と見做すべきものであると云ひました。

此明瞭なる示説が出で、から<sup>(a)</sup>グリージ<sup>(b)</sup>ンゲル氏は其舊説を翻し千八百六十七年の伯林大學精神病學科開設の際述べました辭の中で、妄想は必しも感情異狀を呈する状態即ち鬱狂状態とか躁狂状態とかに續發するものでなくして大多數は原發的に發現するもので、換言すれば古來人の稱せし第二次的偏執狂 (*Sekundäre Verriicktheit*) のみならずして第一次的偏執狂 (*Primäre Verriicktheit*) の存在するものであると云ふことを主張し、以前は患者が己れの有する感情異狀の由來を説明せんが爲妄想なる病的觀念の現はるゝものであるとして居りましたが、今や同氏は幻覺又は主觀的色彩の如く直接の大脳興奮に依るか又は病的知覺より誘發されたる共同觀念として一次的に病的觀念の發生するものであると云ふて之に原發的妄想 (*Primordialdelirien*) なる名稱を與へました、之は亦妄想發生論に於ける觀念學派の濫觴とも稱すべきものであります、が<sup>(c)</sup>カール、ウエスト<sup>(d)</sup>フアル氏は千八百七十六年の漢堡に於ける有名な演説に於て之を正確に賦型しまして妄想は觀念界に於ける障礙であつて偏執者

の有する感觸氣分の異狀は之より招來するものであると唱へました。

グリーゼンゲル氏に引續き(5)ザンデル氏も亦獨立の第一次性偏執狂が存在することを臨床的に認めまして小兒期から神經質で夢想に耽るものは生長するに従て益々甚しくなり詩的戀愛に心酔したり、外圍のものから壓迫せらるゝ感を抱いたりし、二十歳を超えて幻覺が出る様になりますと毒害、被害の考が起るが忽ちの間に自分は高貴の出であると信じ我家は只自分の拾はれた家だから小兒時より虐待されたのだと説明し、其他の幼時からの追想を偽變して皆之と關聯を附け妄想を形成して行く一型があるのを唱へまして、此の如きものは生れながらに其素質を持てるものであるからとて生來性偏執狂と云ふ名を附しましたがウエストフアル氏も此觀察を承認致しました。

斯學界の二權威者たるグリーゼンゲル、ウエストフアル兩氏が此の如く觀念論を唱道しました爲其後精神病を觀念界の障礙を呈するものと感情界の障礙を呈するものとに分ち、其内第一のものに凡て Paranoia なる名稱を附し其經過一時的なれば之を急性と云ひ、終生に亙るものを慢性と稱しました、又幻覺を隨伴すると否とに由て細別を行ふ精神病分類法に努めたのは(6)メンデル氏、ウエルテル氏でありまして其

考察法の簡單明瞭なる爲尠からざる學者の賛同を得ました併し同氏等は之を徴候的系統學と認めて居たものではあるが、今日より見れば寧ろ系統的徴候學を唱へたに外ならないものであります其他(7)クラメール氏が致しました偏執狂の宿題報告では後に述べます感情學派の立論とは全く反對に觀念界に於ける障礙としての妄想、知覺界に於ける障礙としての幻覺を、其二三年前(8)チーヘン氏の偏執狂患者に於て發見しました觀念聯合の支離裂滅に併立せしめまして之等は共に叡智界に於ける障礙で等しく理解官能それ自身の障礙が其基源であると認めました。

ウエストフアル氏は特別に偏執狂と叡智薄弱との直接關係を認めませなんだが、(9)グリーンジンゲル氏の持論としては患者が妄想並に幻覺の實在を確認するのは取りも直さず患者の腦裡が不健全なるのを證明するものであつて、健全なる腦を有する限りは斯かる不條理を信じ得やうぞとの説を立て、多くの學者も之れに賛同し同時に佛國エスキロル氏の創説しました單獨狂の學説を破るの武器となつて、精神の諸他の部分が健全に止まり只或一部にのみ病的現象の現はることは不可能で、假令一部にせよ病的現象の起るには必ずや精神全部に跨る障礙がなければならんとの論旨を普及することになりました(10)シユレー氏の如きは之を明瞭に云ひ現はし

て慢性妄想狂の發生には論理的缺陷即ち批判力、熟考力の減退又は缺陷があるものであつて、急性妄想狂で妄想の起るのは頓發的に發する幻覺が喚起するものであつて、幻覺性夢中状態にあるが爲斯くなるのであると申しました、之等の學者に従へば慢性妄想狂は不治の病氣であるべきであつて後に述ぶるが如くクレペリン氏も此見解に準據して居る處があると思ひます。

以上ではグリーゼンゲル及ウエストフアル兩氏の立てました妄想狂の叡智疾患說尙詳しく申せば觀念疾患說が獨國精神病學界に及した影響を擧げました、然るにグリーゼンゲル氏の妄想自發的起原論は其後の著明なる學者を心服せしむるに至りませんでした、今若し妄想が恰も癲癇の前兆の如く突如として孤獨的に何等の準備なく發現する事が常例であれば、同說も首肯し得られないとはありませんが所謂慢性妄想狂の經過中で妄想が末だ明瞭なる客體投射を有しとりません最初の時期に他の病的變化が既に現はれる事が屢々でありまして云ひ換へますと妄想狂では種々の變態移變の後に確然たる妄想が現はれるものであります、それが爲妄想狂を以て觀念の疾患だと定義した(11)ウエストフアル氏ですら直に凡ての妄想に就てグリーゼンゲル氏の爲した見解を容認しませんで、一方には心氣性精神病より漸次妄

想狂に移行するとの佛國モレル氏の臨床的觀察を是認し他方には從來からありました妄想起原觀ではありませんが患者は先づ自分に起た病的異變を自覺しこの根原を説明する爲の患者自身の取る判斷が則ち妄想であつて逆に云ひますと妄想は患者それ自身に在ては尙健全なる叡智判斷力の病的變化に對する反應より生ずる生産物であるとの考察法を容れ此兩者を巧に組合せて心氣性知覺なる異常知覺を根本として患者が異常を自覺する爲其結果として恰も新らしき裝束を着するものは自ら扮裝の變たのを知てる爲衆人注目を中心となると思ふ如く患者も衆人より注目せらるゝの感を抱くものであると説明しましたが、之が前章に述べましたウエストフアル氏の有名なる一年志願兵の比喻であります、此衆人より注視せらるゝこの精神狀態は其以前でも已に人の知てる處でありまして、既に(12)ハーゲン氏は、汝の事其處に在り(Tua res agitur)と名けて居ります此茫漠たる病的異狀精神狀態は捕捉すべき箇々の病的觀念の未だ現はれて居ないのでありまして普通精神狀態に其類似を求めますと恐怖に最近いものども云ふべきであるから觀念界異狀と見るべきよりは感情界異狀と見る方が至當であります此感情異狀に原發的意義を附けやうとする學者と他方では尙溯て叡智界の一官能に其第一義異常ありと爲す學者もあ

りましてウエストフアル氏の説明では原發病的變化を肉體感覺上に見るものでありまして(13)ウエルニツケー氏の最初の意見に因りますれば追想像の變化の爲現在外界と過去外界との一致を失ふて現在に對しての指南不充分となり、それが爲め誘起する感動異狀の結果として追跡妄想の起るものであるとして居ります、然るに(14)ザンドベルグ氏に至りましては尙ウエルニツケー氏の追想像の病的變化ありとの考よりは充分に解放されては居りませんが、其病的變化の種性に重きを置いて妄想狂にありては其種性は狐疑だと稱するに至りまして明瞭なる妄想狂感情起原學說の起原を作りました、茲に同氏の簡潔なる一言を引きまして其立場を明に致しますに、妄想は鬱狂、躁狂、偏執狂の三病に於て感情に適當し之れに因て決定せられたるものである、則ち小妄想は沈鬱に、大妄想は喜悅に、及偏執者の追跡妄想は狐疑に適當し、前二者に在ては患者は主體であつて最後のものでは患者は被害機關の目的である、この總括であります、又(15)マイネルト氏の最後の考としてはザンドベルグ氏の説及知覺異常説との折衷説の如きを主張するに至りまして、所謂慢性妄想狂の各期の變遷を説明するに先づ其第一期なる心氣性時期を重大視し、氏の解剖學的假定より大脳皮質下殊に延髓球の刺戟に因る知覺鋭敏に基くものと致し外界の刺戟に對して



の興奮性が亢進してゐる爲に小我即ち同氏の所謂第一自我の感受性の亢進を來し、外界の小事に至る迄も注意を向けるに至り、之が爲恐怖を隨伴し外界に於ける事象の意義を悉く自我に關係あるものとし注意妄想が發現し、續いて恐怖を生ぜしむる外界の刺戟に對し人に固有なる攻撃的本性を反映せしめ、己れを推して人に及ぼし爲に他人が害を加ふるものと爲すに至り追跡妄想の現はるゝものであつて、之より追跡の範圍廣汎となる爲前人の己に唱へた如く之は畢竟自己の位地高大なりとの推斷を得て茲に最後の誇大妄想に陥るものと致しました、其外<sup>(16)</sup>クレメンヌ、ナイセル氏の如きは理論的爭論は直接には避けましたが妄想狂に於ける自己關係期の臨床的確定に努めて居りました、尙最後に述べなければなりませんのは<sup>(17)</sup>モエリー氏の心理學的見地よりしての穩當なる説でありまして、同氏は知覺、氣分、觀念内容は箇々獨立に別つべきものでなくして互に直接關係あるものと前提し成人の自己觀念の構成には自己人格と外界との關係が本態的のものであつて之は一種の觀念活動には違ないが愉快、不愉快、愛憎の感情が其素地を作てるものである、それ故に病的に狐疑の時期が來るならば箇々獨立なる著明の被害妄想の未だ現はれて居ない時にも此感情情緒が他種の情緒を凌駕して居るが爲、或外因があれば忽ち之が動機となり、

觀念に病的方向を與へるものであると云ふて居ります。其外ブライグのピック氏學派は又此狐疑的なる病的時期に重きを置きまして其門下に種々の發表をさして居りますが今茲に(18)マルグリユス氏の名を擧げるに止めまじやう。

上述しました二學説から全く獨立である見地から出發しました二見解が千八百九十二年に發表せられました、其一はクレペリン氏他はウエルニッケー氏の致しましたもので其導調は相互間には殆んど反對とも見られますが、併し其共通なる點は孰れも偏執狂の典型的形式として好訴病を取らんとしたことでありませう。

抑此好訴狂は最初千八百五十八年カスベル氏が權利主張よりの狂亂者なる名稱にて、其後ペーメル氏は精神病者の好訴者なる題目を設け二三の記載を致し、千八百六十九年に至りペーメル氏が好訴狂亂なる名を附することゝなりましたが、千八百七十九年(19)クラフト、エービング氏は初めて好訴狂を第一次性偏執狂の一種と見做す様になりまして、第一次性偏執狂の根本型との差異は患者の意見によれば生活的の利害ではなく權利的利益の損害を受け居るもので既に初期から被攻撃者の立場ではなくして攻撃者なる活動的の立場を取ると云ふことであると明白に其特徴を擧げて居ります、此特徴の記載で知ることが出來ます通り此の如きものは或機會に

訟訴上の失敗を招きますと之を以て甚大なる不正を蒙りたるものと致しまして漸次高級審理を要求し、其都度受くる患者が考へて不當とする判決は判官の買收證人の故意的證言等に因て起るものだと思ひ其失敗が重なるに従ひ益々故意に自分の權利を毀くる者の數が増し且位置の高きものも漸次加擔するものと見做し其理由は反對者の自己利益より發する隱謀であると斷じ妄想の範圍擴り其系統組織も強固を加へて行くものであります。

同年に於ける(20)クレペリン氏のカールスルイエの演説ではカールバウム氏の意見を繼承しまして已に述べましたメンデル、クラメル兩氏とは反對なる疾病記載學に従ふて特に疾患の轉歸に重きを置き他の學者の妄想狂と名け居りました多くは只妄想の出現するとのことによりて一の病型中に算入されて居たものゝ中より、疾病の經過長からざる中に痴呆に陥るものを第一に除外し尙一時的に妄想の發生するものは中毒症傳染病等に於て見るもので其一部はマイネルト氏のアメンチアに屬するものだから此種の一時性妄想狂をば *Wahnsinn* と名けて亦妄想狂より分離し且他の精神疾患に屬すべき病例の經過中に發現する妄想時期は疾病論上よりして之に獨立的位置を與ふべきでないと高調しまして純正偏執狂を素因的根原に發

したる永久的不治の妄想の慢性的發生であると定義しました而して同氏の精神病學書の第七に至る迄は好訴狂を偏執狂の範例として居ります。

同年<sup>(21)</sup>ウエルニッケー氏が固定觀念なる題目で發表しました論文では、先づグリーンゲル氏の示唆に因て獨國精神病學界では殆んど破壊されました單獨狂學說を復活せしめるとに勉めまして、固定觀念又は超價觀念に基く限局性自家精神病の存在してゐるのを論じ其主な代表若として好訴狂を取て居りますが、同氏は此固定觀念なるものを必ず權利主張にのみ發現するものに限定さゝずに尙戀愛に因する限局性自家精神病の如きをも其例中に含まして感情高調せる經驗に續ては此事象に關聯する觀念は超價となり此範圍に屬するものに就てのみ異常判斷を來すものであると云ふのであります、而して此の如き患者が其自分の固定觀念の謬ならざるを立證する爲に種々の材料を撰び之を引用するのは取りも直さず固定觀念に關する以外の全腦部は健全であると云ふのを立證して居るのであるとの皮肉なる口調にて反單獨狂學者に鐵槌を加へました。

併しウエルニッケー氏の學說は其引用せる例證の適當でなかつた爲に餘り人の耳を聳てしめることが出來なかつたのみならず<sup>(22)</sup>千八百九十五年に<sup>(23)</sup>エー、ヒツチ

ツヒ氏の著せる好訴狂と題する單行本では好訴狂は慢性妄想狂の一型であつて其病的機轉は甚緩慢ではあるが之を起すに至るのには偏執狂と同様に精神薄弱が其原因であることを立證しやうと努めまして、爾後多數の學者も之に従ひクレペリン氏の如きは臨床的觀察よりして著明なる痴呆に陥るべき妄想發生精神病より偏執狂を獨立せしめて好訴狂を其病範として居りますが<sup>(24)</sup>其成書の第七版に至る迄偏執狂も經過と共に多少の癒成を見るは免れないと仄かして居ります。

此の如くクレペリン氏は偏執狂は不治の疾患であるから一時性に妄想を呈する病症と本態的の區別を認めんとして居りましたが、前に述べましたウエルニッケー氏の考察に依りますと限局性自家精神病に於て病的となつてゐる思想が一旦其超價たるを失へば患者は舊態に復すべき理であります、此點に付て最注意を要します業績は<sup>(25)</sup>はフリードマン氏の緩和型偏執狂の臨床的創説であります。

是より前偏執狂は體質的基礎に發するなりとのクレペリン氏の宣言に引續き<sup>(26)</sup>テイーリング氏は偏執狂の素因は個人性質の生來的異常であるとしまして、妄想感覺論者の唱ふる如く偏執狂者の狐疑は外界の知覺異變に因つて初めて來るものではなく已に其以前より雛形様に存してゐるものであつて、其他の積極的の性質即ち驕

慢名譽心、兎も角も自己意義に就ての意識増進、其生活中に於ける要求殊に他人より注目を受けんどの要求多大等と共に存するものであると云ひましたがフリードマン氏も同様に狐疑性であつて且興奮性なる人格では其人に感情上の振盪を與へる體驗がありますと漸次之に付隨する妄想が現はれ、或者では注意關係妄想迄も生じまして、多くは二三年の経過後に之に對する感情の減弱すると共に徐々に忘却され元來の人格に復舊するのであるが、病的經驗に就ての病識は出ないものであると申して居ります、而して病原論見地では好訴狂と同様のものであつて兩者共内發的妄想發生であることを立論しまして急性偏執狂であるがクレペリン氏の躁鬱狂に屬すべきものとの區別として後者では發生した妄想は患者の普通精神狀態と沒交渉なものであるから之を外發性妄想發生としまして前者と對峙せしめました。

此説は次に述ぶべき觀察に因て其學問的の價値を高めまして純粹の臨床的範圍に於ても二三の論文が發表されて居ります(27)。

引續き妄想發生に就て實驗的とも云ふべく目の當りその發現を觀察するの機會がありまして妄想は腦の器質的疾患に基かずとも特殊の人では或情況の許に發生するのを見又此或者は此條件から脱すれば消散するのを知りました、即ち妄想は器

質的變化に隨伴する外に官能的にも成立し得るものであるとの觀察であります。

此の觀察は特殊の社會的環境で行はれたものでありまして其中の重なるものは監獄に於てあります之に關するものの中(28)ジーフエルト、ボンフェツヘル、ウイلمانズ、ビルンバウムの諸氏は未決監被拘留者に見る精神異状を除き既決囚人に發生せる精神病患者を研究しました之には二類ありまして其第一類は普通世間に見るものと同一の精神病でして第二類は此徒輩に特有なものであります、後者は特殊の生來を持てるもの即ち變質者が其處る環境に對する反應と見るべきものであつて、精神の浮動性の爲に、居る場所の刺戟で病的現象が起て來るのであります、妄想としては監獄に特有の被害妄想や其境遇より免れたとの希望的想像から誇大妄想も現はれ多くは頓發的に出現します、ビルンバウム氏は此等には系統形成がないと云ふ點から妄想様像と名けて居ります、又此病的觀念は浮動性であつて普通に見る偏執狂の妄想とは大に色彩を異にして居るとは云へ之に因て妄想は精神的に基因して起るのを事實的に證明し又フリードマン氏の主張を確定するものになつたのであります、尙前記の學者は第一類精神病に見る妄想は普通世間の患者に見るものと其内容は同様であるとの見解を抱いて居りましたが、曾てそれ迄に囚徒精神病に

就ての研究を發表して居りました(29)リュデイン氏は千九百九年に終身懲役囚徒に見る精神病の研究を公にし之等に在ては病症の種類を問はず妄想の内容は無罪、特赦、放免に關係するもの即ち自淨機轉から起るものが多いのを決めましたので、如何なる疾患でも妄想の内容は境遇に支配せられるものであると云ふことを知りました、其外此境遇者に起り易かるべき好訴狂に就ても之等の學者は亦同じく其境遇的反應であることを確認しました尙反應として發しました妄想が其刺戟より脱することが出來ない爲繼續することが長くなると、考慮は之のみに集注して終には精神活動性の狹隘を來しまして外觀上恰も痴呆に陥れるが如きことあるのを觀察しました。

前記レウイー氏の外にもクレペリン氏の門弟なる(30)ウイルマン氏すら其師クレペリン氏の偏執狂に對する見解に異を樹てまして之を官能性精神病と見做しました。

之と同時に好訴狂色彩を帯びたる系統的被害妄想狂が他の或寰境中に發生することが認められまして(31)ハイルブロンネル氏及クルトメンデル氏は遭難者の年金要求の訴訟係争中に己れの希望を満足さして呉れない處から之を起すものがある



ことを報告しました。

其他已に千九百二年<sup>(32)</sup>チーヘン氏は家庭教師に特殊の妄想が起ることを見之を家庭教師妄想と名け、又之に附隨して<sup>(33)</sup>スベヒト氏は小學校教員に於ても同様の實驗を爲し得ると申して居ります其他直接生活環境と云ふ譯には參りませんが一定の狀況の下に之に關聯する妄想の發生することの實驗もありまして<sup>(34)</sup>ヘツド氏の内臓疾患に隨伴する精神異變中に記載し居る狐疑の病的狀態を取りて<sup>(35)</sup>ピツク氏は偏執狂の初期又はフリードマン氏の緩和型偏執狂と同一視して居ります又<sup>(36)</sup>クライスト氏は亢進せる自己意識人を支配することが好きな頑固な人にして受感性興奮性強く且狐疑に富める先天性異常者を弱偏執性素質と名けて其或者は四十乃至五十歳に生殖器官々能の停止するのが誘因となつて妄想狂が起り之を退縮期偏執狂と名けて發表して居ります又<sup>(37)</sup>クレペリン氏の重聽者及聾者に發する追跡妄想狂も精神起原的に説明し得られます。

今爰に述べました學者等は妄想の發生を心理學的に説明せんとしたものであります、之等は有意無意に係らず共に皆フロイド氏學說の影響を承けて妄想は皆其個人の情緒的傾向に因て發生するものである、ので其根源は多くは遂に無意識中に

隠るゝとも其生産物たる病的觀念は有意識界に在りて患者は之を確信し妄想となつて現はれるものでありますから、精神生活上最大影響を有する「希望」をば積極的にせよ將又消極的にせよ凡ての情緒的意向の代表者と致しまして之等妄想を希望妄想と名けました。此「希望」は恰もウエルニツケー氏の所謂超價觀念に適合するものとなるのであります。

時代順から申すと少しく後戻りを致しますが(38)ゲイスベヒト氏は千九百五年の論文に於ては末だ尙慢性躁狂の續發的徵候として見る妄想發生も偏執狂に於ける妄想發生も共に病的情緒に因するものではあるが此兩者は區別すべきものであつて只今日迄偏執狂と診斷されたものゝ中には慢性躁狂に屬すべきものが多いと力説しまして兩者間の鑑別として慢性躁狂に發する妄想は憤慨忿怒の生産物であり偏執狂のものゝ如く其妄想を惹起した感情から解放されて居らぬもので今尙病的氣分の桎梏の許にあるから妄想系統なるものは構成しないと申して居ましたが千九百八年の論文では更に一步を進めてクレペリン氏の獨立せしめた偏執狂は躁鬱狂の一變種であると唱へまして先づクレペリン氏の偏執狂の模範型たる好訴狂は慢性躁狂にある病的目錄の全部を持て居て妄想の發生しないものから妄想系統を

作るに至るもの迄漸次的の移行があるとの論據で好訴偏執狂は即ち好訴躁狂である。云ひ好訴狂を除いた他の偏執狂の種類中先づ其誇大性形式のものに就ては誰にれも想到し易き如く之を單純慢性躁狂と同一視しましたが追跡妄想の色彩を帯びてゐるものに付ては之を又更に二三に區別して或者に在ては躁狂發作中に誇大妄想が生じ此が緩和するも悲憤性の興奮は尙残り追跡妄想が現はれて持長することがあり又或者では最初から追跡妄想があつて之では憂鬱的感情異狀が主であるけれども追跡妄想を起すには躁狂的副音が必要で、之あるが爲自己感情を高め妄想構成に對する刺衝を興ふるのであります、此甲乙孰れであつても追跡觀念が起るのは持久する躁鬱併在體質の爲であつて追跡妄想の根本情緒は快不快の混合状態である、其他慢性躁狂の経過中に一時性に忿怒的又は狐疑的の性質が現はれ偏執狂となり、此偏執狂は或は治し或は定期性に反復することもあるのは自明の理です、尙更に妄想構成には感情移動の結果のみでは充分でなくて觀念聯合組成の粗雑となること並に觀念聯合作用の増進が加はらねばならんが之等は皆共に躁狂の徴候であると稱しました、其他偏執狂患者の遺傳に躁鬱狂があるのを見て生物學上よりしても偏執狂は躁鬱狂の中に含まれべきものであると申しました。

クレペリン氏に因て範例を好訴狂に執たる偏執狂の發現するには精神的衝動が必要であることは今迄のことで證明されて居りますが、同一の精神的衝動により凡ての人が必ずしも本病を招來するのでありませんから本病を發するには其の患者の本來的性質に一種特有の異常があるとせねばなりませんのです、此異常には學者銘々多少異つた名を附けて居りますが今之を偏執性性格と申して置きましやう、此様な性格が存在していると云ふことは番に臨床的觀察計りでなく囚徒精神病を研究した學者も認めて居るのでありますが、只今申しましたスベヒト氏の考によると此偏執性々格を躁鬱性々格より誘導しまして後者の中に含まさうとするのであります、只二三の學者丈は之に賛成したものゝ多數學者は容認致しませんだ、一體スベヒト氏の執りました方法は兩病間に徵候上又は經過上の類似點があると兩病を接近さして終に同一疾患として取扱ふのであります、此方法は生來的人格の研究上には不適當なのであります、と申しますのは對比上相容れませんが異つた性格も緩和してゐる状態である時には相似の點がありまして混同し易いものですから型式確定には兩極端の例を以て對比しなければ切實ではありませぬのです、此點からスベヒト氏の説には攻撃が強く特に<sup>(39)</sup>プムケー氏及ストランスキー氏の之に就ての所論

は甚だ當を得て居ります、元來躁鬱狂では感情の移動が強く凡ての精神作用は之に平行するのが特徴でありますのに、偏執狂では感動が去り平静となつても病的考慮を訂正することが出来ない計りでなく、反つて益々同一方向へ進行するのが特徴なので云ひ換へますと一方のものには精神活動の動搖性を見他方のものには其固執性を見るのであります。

扱躁鬱狂でも妄想の發生することあるのは勿論ですが此種のものとの他の原因から來る妄想との區別を明白に致し且一般妄想基源に就て纏まつた研究を最近に發表したのは(40)ハー、ウエー、マイエル氏であつて同氏はスベヒト氏の稱する如く偏執狂の妄想は感情移動に因て起るものではない、躁鬱狂に現はるゝ妄想なれば感情移動と共に變遷消長するものであるが之と發生上全く違つた妄想があつて臨床的には種々の疾患に起るものであるが、其心理學的根原は患者の抱く希望に原因しプロイレル氏の自家考慮の結果として生ずるものであつて此の如き妄想の核心は不變である。此種の妄想を其構成に従ひ希望追隨妄想と名けて居りました、獨り此種の妄想のみを病的徵候とし他に障礙のなき疾患をば偏執狂と稱して居ります。

此時代に於て獨國の精神病學大家たるクレペリン氏の偏執狂に對する見解の變

遷を見ますと千九百四年に出版しました(41)同氏精神病學の第七版に於ては偏執狂なるものは永久不變の動かすべからざる妄想系統が意識の明瞭及び考慮、意志、動作上の秩序を完全に保存して徐々に發育するものであると云ひ、續いて偏執狂に屬すべき者は必然的に全生活觀の深刻なる變化に陥るものであつて外界の人及事象に對し患者の執る見地の偏倚を見るに至るものであると云ふてゐるのを見れば偏執狂に屬する患者は假令痴呆に陥らざるにもせよ疾病の爲に患者の人格には恢復し能はざる變化を來すことを認めて居るのでありまじやう、併し前に述べました特種境遇に因て發する精神病の研究に因て千九百十二年以降に在ては同氏の思想に變化を來しました様で(42)其著書第八版に於ては在來偏執狂の一種と見做して居た好訴狂を獨立せしめ之を災害神經病、囚徒に於ける精神基因性精神障礙と一括して運命精神病なる一病屬を作りました而して偏執狂は偏執性稟賦を持てる云ひ換へますと自負及狐疑の混合性質を有してゐる精神的畸形者に内部の原因より隱約的に發育し、純粹に綜合的に構成する妄想であつて患者は精神的人格の構造を完全に保有して居るものであると云ふて居ります、之で解る如く同氏も今日では偏執狂は疾病機轉でなくして先天性異常性格者の或種類の疾患的狀態と認めて、慢性で不治である

も之は病的人格の自然的發育に外ならないのであると認めるに至つたものと思はれます。

其の外同氏は從來早發癡狂中に含ましたる最慢性に發育する妄想を有する病型を癡呆状態とは認めて居るけれども今は早發癡狂より獨立せしめ之れに<sup>(43)</sup>『パラフレニー』なる名稱を附けて居ります其動機は此の如き患者は長き經過の後に精神活潑性を失ふのは一般でありますが緊張性徴候又は精神内部失節症或は精神分離症的病相が起らないと云ふ點に重きを置てのことでありましやう同氏の此考は同氏の學派に屬する人である<sup>(44)</sup>フオン、ヘツスリン氏、ストランスキー氏等の認むる處ではあります尙多少見解の相違がありましてフオン、ヘツスリン好訴狂と偏執狂とを區別することに不賛成である又クレベルン氏は『パラフレニー』の或種類のものには幻覺がないと稱して居るが自分の實驗では之を缺くものはないと稱して居りますストランスキー氏はクレベルン氏の所謂パラフレニー中には偏執狂に屬すべきものを含有して居ると云つて居ります。

(1) Fr. Hoffmann, Über die Einteilung der Geisteskrankheiten in Sieburg. Allgemeine Zeitschrift f. Psychiatrie, 19. Bd. (1862), S. 367-391.

- (2) Snel aus Hildesheim, Ueber Monomanie als primitive Form der Seelenstörung. Allgemeine Zeitschrift f. Psychiatrie, 22. Bd. (1865). S. 368-381.
- (3) W. Griesinger—Vortrag zur Eröffnung der psychiatrischen Klinik zu Berlin am 2. Mai 1867. Archiv f. Psychiatrie Bd. I. H. 1 (1868-1869) S. 143-158.
- (4) C. Westphal—Über die Verriektheit, Autoreferat des auf der 49. Versammlung deutscher Naturforscher und Aerzte in Hamburg im September 1876 gehaltenen Vortrages. Allg. Zeitschrift f. Psychiatrie Bd. 34, H. 2. (1878) S. 252—257.
- (5) Wilhehn Sander, Über eine specielle Form der primären Verriektheit. Archiv für Psychiatrie, Bd. I., 1868—69 S. 387—419
- (6) E. Mendel—Paranoia. Eulenburg's Real-Encyclopädie II und III Auflage.  
C. Werner, Die Paranoia, Stuttgart, 1891.
- (7) A. Cramer, Abgrenzung und Differential-Diagnose der Paranoia. Nach einem im psychiatrischen Verein zu Berlin am 15. December 1893 erstatteten Referat. Allg. Zeitschrift für Psychiatrie Bd. 51 (1895) S. 286—369.
- (8) Th. Ziehen, Über Störungen des Vorstellungsablaufes bei Paranoia. Archiv für Psychiatrie, Bl. 24 (1892) S. 112-154 u. 365-402.
- (9) W. Griesinger, Die Pathologie und Therapie der psychischen Krankheiten. III Auflage, Braunschweig, 1871. (unveränderte Herausgabe der II Auflage von 1861) S. 323.
- (10) H. Schille, Klinische Psychiatrie. v. Ziemssens's Handbuch, XVI Bd. III Auflage, 1886. S. 131.
- (11) Störing, Vorlesungen über Psychopathologie S. 333—334. (前掲渡邊ノ演説ニ於テ爲セルモノナリト傳ヘラル、モ其自家抄録中ニハ見出スヲ得ズ然レバモ此書中ニハ詳シク引用サル)
- (12) Hagen, Studien auf dem Gebiete der ärztlichen Seelenkunde. 1870. S. 41.



- (13) C. Wernicke, Ueber den wissenschaftlichen Standpunkt in der Psychiatrie. Cassel, 1880 S. 17.
- (14) Richard Sandberg, Beiträge zur Charakteristik der Wahnhäsen bei chronisch Verirrten, Dissertation. Breslau, 1887, Ein Teil der Dissertation abgedruckt unter dem Titel: Zur Psychopathologie der chronischen Paranoia. Allgemeine Zeitschrift für Psychiatrie, Bd. 52 (1896) H. 3. S. 619—654.
- (15) Theodor Meynert, Klinische Vorlesungen über Psychiatrie. Verlag von Braumüller, Wien, 1890. Paranoia. Primäre Verirrtheit. Chronischer, partieller Wahnsinn. Verfolgungswahn und Grössenwahn. S. 140—211.
- (16) Clemens Keisser, Erörterungen über die Paranoia vom klinischen Standpunkte. Vortrag, gehalten in der Sitzung des Vereins Ostdeutscher Irrenärzte zu Breslau am 5. Dezember 1891. Centralblatt für Nervenheilkunde und Psychiatrie. XV Jahrg. (1892) S. 1—20.
- (17) Moeßl, Diskussion zu Cramer und Boedecker's Referat „Paranoia, in der 80. Versammlung des psychiatrischen Vereins in Berlin am 17. März 1894. Allgemeine Zeitschrift f. Psychiatrie. Bd. 51, 1895 S. 197—200.
- (18) Alexander Margulies, Die primäre Bedeutung der Affekte im ersten Stadium der Paranoia. Monatschrift f. Psychiatrie u. Neurologie, Bd. 10, 1901. S. 265—288.
- (19) R. v. Krafft-Ebing, Lehrbuch der Psychiatrie 1879. Das Irresein der Querkulanten und Prozesskränker. II. Bd., S. 87 u. ff. Derselbe, Über den sogenannten Querkulantenwahnsinn. Allg. Zeitschrift f. Psychiatrie, 35. Bd. (1879) S. 395-419 (mit Bibliographie)
- (20) Kraepelin, Die Abgrenzung der Paranoia. Vortrag in der 24. Versammlung des südwestdeutschen Vereins in Karlsruhe am 5. Nov. 1892. referiert in Neurologisches Centralblatt, Jahrgang 11. 1892. S. 795.
- (21) C. Wernicke—Über fixe Ideen. Deutsche medizinische Wochenschrift, 18. Jahrg., No. 25 (23. Juni 1892) S. 581—582
- (22) Max Köppen, Zur Lehre von der überwertigen Idee und über die Beziehung derselben zum Querkulantenwahnsinn.

- (Vortrag in der Sitzung des psychiatrischen Vereins zu Berlin am 16. Dez. 1894.) *Allg. Zeitschrift f. Psychiatrie* Bd. 51. (1895) S. 998—1001.
- (23) Eduard Hitzig—Über den Quäntantenwahnsinn, seine nosologische Stellung und seine forensische Bedeutung. Verlag von Vogel, Leipzig. 1895. (Besonders das Capitel, „Die Geistesstürche der Verrückten“). S. 89—120)
- (24) E. Kraepelin—Psychiatrie. VII. Aufl. 1904 II. Bd. S. 609 u. S. 619.
- (25) M. Friedmann, Beiträge Zur Lehre von der Paranoia. I. Über milde Paranoiaformen. *Monatsschrift f. Psychiatrie u. Neurologie*. Bd. 17. (1905). S. 467—484 u. 532—560.
- (26) Th. Tilling, Über die Entwicklung der Wahnideen und der Hallucinationen aus dem normalen Geistesleben. Festschrift zum 75 jährigen Jubiläum der Gesellschaft praktischer Ärzte Zu Riga, von der städtischen Irren- und Pflegeanstalt Rothenberg. 1897. referiert von Gaupp in *Centralblatt für Nervenheilkunde u. Psychiatrie*, XXII Jahrg., 1898. S. 24—26.
- (27) B. Pfeifer, Über das Krankheitsbild der „Zirkumscripten Antopsychose auf Grund einer überwertigen Idee“. *Monatsschrift f. Psychiatrie u. Neurologie* Bd. 19. (1906) S. 46—67.
- Max Loeewy, Beitrag zur Lehre vom Quäntantenwahnsinn. *Centralblatt f. Nervenheilkunde u. Psychiatrie* 33. Jahrg. (1910), H. 3. S. 81—97.
- (28) E. Siefert. Über die Geistesstörungen der Straftat, mit Ausschluss der Psychosen der Untersuchungshaft und der Haftpsychosen der Weiber. Verlag von Marhold, Halle, 1907.
- K. Bonhoeffer, Klinische Beiträge zur Lehre von den Degenerationspsychosen. *Hoché's Sammlung*. VII. Bd., H. 6. Verlag von Marhold, Halle, 1907.
- K. Wilmanns, Über Gefühlspsychosen.—Referat in der Versammlung südwestdeutscher Irrenärzte in Heidelberg 1907. *Hoché's Sammlung*. VIII. Bd. H. 1. Verlag von Marhold, Halle, 1908.

- K. Birnbam. Über vorübergehende Wahnbildungen auf degenerativer Basis. Zentralblatt f. Nervenheilkunde u. Psychiatrie. 31. Jahrg. (1908). S. 637—651.
- (29) E. Rüdin, Über die klinischen Formen der Seelenstörungen bei zu lebenslänglicher Zuchthausstrafe Verurteilten. Habilitationsschrift der Universität Zu München, 1909.
- (30) K. Wilmanns, Zur klinischen Stellung der Paranoia. Zentralblatt f. Nervenheilkunde u. Psychiatrie; 33. Jahrg.. 1910. S 204.—211.
- (31) K. Heilbronner. Hysterie und Querulantenwahn. Ein Beitrag zur Paranoiafrage. Zentralblatt f. Nervenheilkunde u. Psychiatrie, 30. Jahrg (1907). S. 768—784.
- Kurt Mendel, Über Querulantenwahnsinn und „Neurasthenia querulatoria“ bei Unfallverletzten. Neurologisches Centralblatt, 28. Jahrg. (1909). S. 1140—1154.
- (32) Th. Ziehen, Psychiatrie, II. Aufl. (1902). S. 284
- (33) G. Specht, Über die klinische Kardinalfrage der Paranoia. Zentralblatt f. Nervenheilkunde u. Psychiatrie, 31. Jahrg. (1908). S. 828.
- (34) H. Head, Certain mental changes that accompany visceral disease. (The Goulstonian Lectures for 1901.) §. The causes that underlie the state of suspicion." Brain, Vol. 24, p. 382 and following.
- (35) A. Pick, Zur Lehre von den initialen Erscheinungen der Paranoia.—Bemerkungen. Neurologisches Centralblatt, 31. Jahrg. (1902). S. 2—5.
- (36) Kleist, Die Involutionsparanoia. Allgemeine Zeitschrift f. Psychiatrie, 70. Bd. (1913), S. 1—134, besonders III, 2, 3, 4,
- (37) Kraepelin, Psychiatrie, VIII. Auflage IV. Bd., III. Teil. 1915 Der Verfolgungswahn der Schwerhörigen. S. 1441—1448.

- (38) G. Specht, Chronische Manie und Paranoia Zentralblatt f. Nervenheilkunde u. Psychiatrie, 28. Jahrg. (1905) S. 590—597.
- Über die klinische Kardinalfrage der Paranoia. Vortrag in der Jahresversammlung des Vereins bayrischer Psychiater zu Erlangen am 10. Juni 1908. Ibidem, 31. Jahrg. (1908). S. 817—833.
- (39) Oswald Bumke, Über die Umgrenzung des manisch-depressiven Irreseins. Zentralblatt für Nervenheilkunde und Psychiatrie 32. Jahrg. 1909. S. 381-403.
- Erwin Stransky, Das manisch-depressive Irresein. in Handbuch der Psychiatrie, herausgegeben von Aschaffenburg, Specialer Teil. 6. Abteilg. 1911. S. 104-107. 及同氏ノ後ニ掲ガキ1913年ノミュンヘンニ於ケル宿題報告中ノ附圖ヲ参照ス
- (40) H. W. Maier, Über katathyme Wahnbildung und Paranoia. Zeitschrift f. d. gesammte Neurologie u. Psychiatrie. Originalien. 13. Bd. (1912) S. 555-610.
- (41) E. Krüppelin, Psychiatrie, II. Bd., 1904. S. 595-596.
- (42) E. Kraepelin, Über paranoide Erkrankungen. Zeitschrift f. d. gesammte Neurologie u. Psychiatrie. Originalien. Bd. II. (1912) S. 617-638.
- E. Kraepelin, Psychiatrie, IV. Bd. (1915) XII. 3. Die Schicksalspsychosen (Symptomopathien) (J. Der Querulantenwahn.
- IX. Die Verriektheit (Paranoia).
- (43) E. Kraepelin, Psychiatrie. III. Bd. (1913) IX. B. Die paranoiden Verblödingsen (Paraphrenen).
- (44) Referate über, Die paranoiden Erkrankungen" erstattet auf der Versammlung des Vereins bayrischer Psychiater in München am 27. Juni 1913, von C. von Hässlin und E. Stransky. Zeitschrift f. d. gesammte Neurologie u. psychiatrie. Originalien. Bd. 18. (1913) S. 363-386 u. S. 387-416